

ボンベイでの五日間

平岡昇修

私が初めてインドの地に足を降ろしたのは、一九七二年（昭和四七）四月一日であつた。暑い熱風が顔に吹きつけ、やつとインドに到着した喜びと不安とがよぎつた。まず私は、第一の関門である税関の前に着いた。そこは、観光旅行者と長期滞在者にわかれてゐる。私はインド政府の留学生であつたが、厳しく調べられる長期滞在者ゲートに通された。

私はICCR（インド文化交流協会）が、職員を空港に派遣しておくという日本のインド大使館の言葉を信頼して、税関員の前に立つた。しかし結果として、カメラとタイプライターとラジオに一二〇〇ルピーもの税金をかけられたのである。また悪い時には悪い事が重なるようで、日本で予約しておいたハイデラバード行きの飛行機は早朝のみしがなく、仕方なくボンベイで一日泊まらなければならなくなつた。

ところでICCRの職員は、空港のどこにもみあたらなかつた。その時私が所持していたお金は、僅か一〇〇ドル（約七〇〇ルピー）ほどであつた。インドの物価は安いし、インドに着けばインド政府の奨学金（一ヶ月三〇〇ルピー）がすぐに手にはいると思つていたし、だから二ヶ月分程度のお金があれば十分だと考えていた。そして途中、香港でタイプライターを買つたのだが、そのうち自分の考えの甘さを思い知る破目になつたのである。私は早速にも、インド人的思考方法と粘り強さを、いやが応にも体験させられたのである。それは、外国語を使つての初めての喧嘩であり、自分の語学力の不足をつくづく思い知らされたことでもある。二時間近くの取り調べの後、そこで得られた結果は、カメラにのみ一二〇〇ルピーの税金を課すというものであつた。それは、私が最後には泣き出してしまい、その涙に税関の役人の心が動かされた結果だったのである。しかし課税が、たとえばカメラ一つだけだつたとしても、一二〇〇ルピーなんて財布の底をはたいても出てくるはずはなかつた。

仕方なしにカメラは、空港に保管してもらうことにした。そして、空港の公衆電話からボンベイの日本領事館に電話をいれた。しかし悪いことに土曜日で、電話口に出た日本人は、税関を出てしまった以上どうにもならないといい、今日は土曜日で領事館の業務は終了してしまつたとの冷たい返事であつた。そこで私は、仕方なく航空会社が手配してくれたホテルへ向かつた。ホテルに着くなり、ICCRに電話した。電話番号は、以前マドラスに留学しておられた京大の重松氏が

インドでのトラブルを考えて教えてくださっていた。しかしその電話番号は、すでに変更になっていた。ホテルの交換手に新しい電話番号を調べてもらい、やつとのことで連絡が取れた次第である。その事務員の言うには、月曜日に事務所が開くから、ハイデラバードに飛ばないで、一所長にあつて話をしろというのである。彼は中級のホテルである YMCA International Guest House を紹介してくれた。

私は航空会社の手配してくれたホテルを出てタクシーを雇い、YMCA のホテルへ移ることにした。タクシードライバーは、初老の外人慣れした悪そうな顔つきの男であつた。私は、この男にだまされてはならないという気持で、自分はインドのマハーラージャ（大王）だと心に思いこませ、車のシートに深々とすわり、媚びることなく会話をかわした。車窓から見えるデーヴァナーガリー文字で書かれた広告を、サンスクリットの読んでみせたりもした。その度に運転手は、そうではなくこう読むのだとか、おまえはどこで読み方を習ったのかなどと聞いてきた。すると私は、何度もインドに来たことがある、しかし、ボンベイは初めてだ、と言いつ返した。車は三〇分ほど走つたのに、まだ着かない。そしてもうすぐもうすぐといいながらやつと着いた所は、MCA ではなく YMCA であつた。運転手は勘違いしたのだ。私は彼に騙されてしまったと思ひ込んだ。

その初老の運転手は、わざとらしくまわりの運転手仲間に YMCA のホテルを聞きにまわり、やつと場所がわかつたようである。私はその時も、よく演技をするなど、インド人の底知れぬ恐ろしさに当惑してしまつた。やつとの事で目ざすホテルに到着したのだが、さあ、それからが大変である。安心したのもつかの間、タクシー料金を支払う段になつて、また喧嘩である。料金はメーターどおりではなく、何やら車の中から数字の並んだ紙を取り出し料金が改正されたから新料金を支払えというのである。ぐるぐる見たくもない市内見物をさせられ、その上メーター以上の金額と、更には荷物料金を支払えというのであるから、当然頭にきてしまつた。そうこうしている間に野次馬が集まり出し、その中の紳士風の男が、この難問を解決してくれた。結果は新料金を支払えということであり、荷物料金は不要になつた。身心共にたくたになり、ベッドに横たわつた。長いインドの一日を、天井で回る扇風機を見ながら思ひかえしてみた。

翌日は早朝から、やかましい町の車と人の叫び声で起こされた。窓の外をのぞくと、町がこれほどまでに汚い所かとびっくりさせられた。外に出るのが恐ろしくなつた。しかし、勇気をふるつてインド政府観光局めざして歩きだした。一応の道順をホテルで教わり、道端で地図を買い求め、ボンベイセントラル駅よりチャーチゲイト駅まで電車で行つた。駅の便所にはいつてびつくりした。まわりが血で真赤なのである。そして老女の口にも真赤な血がにじみ出ている。インドの病

気は話に聞いていたが、これほどとは想像もしていなかった。駅前で巡査にインド政府観光局をたずねたが、英語が通じない。よく考えてみれば、そこらへんは日本でも同じかもしれない。すると、またもやインド紳士が現われてえてくれた。しかし日曜のため休日であった。

海岸の方へ歩いて行くと、外国の航空会社の名前が見える。日本航空の事務所もあった。なにか親しい友人にめぐり会ったような気持になる。中ではヒッピー風の旅行者が二、三人週刊誌を見ていた。私は、旅慣れた彼らとサルヴェーシオンアーミーという宿舎に行き、インド生活に対する彼らの意見を拝聴することになった。しかし彼らと会ったことで、だいぶ私もインド人らしくなった気がした。

翌朝早速、日本領事館に電話をいれた。しかし答えは、「あなたはインド政府の留学生だから、当方とは関係がない」という冷たい女性の声がした。それにくらべてICCRの事務員は、ホテルまでタクシーで迎えに来てくれた。ホテル代が高いというのと、事務所に泊まれというのである。そこで所長に会った。所長は女性で、頼りないなと思っていると、どうしてどうして親切な才女であった。インドの首相が女性であることが納得できた。私の話を聞いた男の事務員は、税金を支払うのは当然という顔をしていたが、所長だけは私に同情して憤慨してくれた。そのとき、彼女こそインドの女神に思えた。しかし彼女もインド人である。さつそく税関宛の手紙は書いてくれたのだが、私一人で空港へ行けというのだ。これには、少し驚いたが、やつとのことで一人の事務員を連れて行くことを許してくれた。タクシー代は当然私が支払うことになる。しかし税関での交渉は失敗であった。どうにも要領を得ない。仕方なくその日はあきらめることにした。

その日の夕方、すばらしい日没を見た。事務所は「女王の首飾り」と称される海岸沿いであり、真赤な太陽が海中に没するのである。あのように大きな太陽は、生まれて初めて経験するものであった。その夜事務員は、本場のインドカレーとしぼり立てのオレンジジュースをご馳走してくれた。夜道には、人がごろごろ寝ていた。それは私のインド観を根本から覆す出来事であった。インドで一番美しい町といわれているボンベイがこれだから、他の町の事を考えるといやになつてくる。

翌日は、秘書が税関へ一緒に行ってくれることになった。税関室で三時間の押し問答の結果、三〇〇ルピーを支払い、カメラ番号をパスポートに書き込むということで話が決着した。粘り勝ちという所である。今から考えると、四日間のように自分がインド的になってしまった気がする。そして税金は支払わなくてもよいものだと考えるようになっていた。一二〇〇ルピーが三〇〇ルピーになったのだが、喜びも湧いてこなかった。お金を持っていなかったので、翌日支払うとい

ということ帰ってきた。

次の日カメラを受取り、私は英語研修のためハイデラバードへ出発した。しかしそれまでの五日間は、私に色々な事を特訓してくれた。一番の成果は、インド的に大きく時間を捉え、大海の大波にでも漂っているつもりで物事に接し、仮に自分の意見が間違いであろうが、徹頭徹尾自分の意見を通すことを学んだ。このことは、何か古代の哲学者の思想に通じるような気がする。

後にICCRの連中が話してくれたことであるが、まず税関で大量の税金を私に課した理由は、私が日本人としてはまあまあ通じる英語を話したために、何度もインドに来たことのある人間かと勘違いしたらしいのである。またタクシードライバーが誤まってYMCAに私を連れて行つたのも、そちらの方が有名だからであり、私の捜していたYMCAは、三ヶ月程前に建てられたばかりで一般にはよく知られてなかった。またタクシーの新料金については、ボンベイの物価が他の都市に比べ非常に高いため、料金が年々上昇することによるという。また駅の便所の真赤な血にしても、血ではなくてパーンという一種のインド人の嗜好品であり、口の中で囁んでいると赤く変色し、唾を吐くたびに真赤にそまるものなのであった。

何はともあれ、理解に苦しむのは、インド的日本人の態度である。インド的日本人よりは、インド人の方がはるかに上等である。私もインド的日本人にならないよう、努力したいと思っている。